書籍紹介

小曽戸洋 ほか 編
『日本医家伝記事典――宇津木昆台『日本医譜』――』

第31回（令和元年）矢数医史学賞を受賞した本書は，宇津木昆台（1779～1848）編纂の日本の医家伝記集成（医家事典）『日本医譜』のうち，現存する6種類の写本の異同をすり合わせ，66巻分を翻刻したものである．

我が国の著名な医家伝記集成（医家事典）としては，江戸期には黒川道祐の『本朝医考』，浅田宗伯の『皇国名医伝』があり，昭和期には竹岡友三の『医家人名辞書』などがある．このなかで，19世紀前半に書かれた『日本医譜』は，これまでに編纂された近代以前の日本の医家伝記集成としては最大のものであり，網羅性も高く詳細を極めている．

にもかかわらず，『日本医譜』は刊行されずに終わり6ヶ所に写本が伝わるのみであり，しかもいずれも缺巻がある．これまでは，その存在を知る研究者しか利用することができず，これが活字化される意義は極めて大きいであろう．

収録内容としては，時代的には古代の少彦名命や帰化人医師からはじまり近世幕末の医家まで，地理的には日本全国のみならず蘭館医や清国人医師などにも及んでおり，収録された医師の数は7000人以上にのぼる．近世社会の中で医師が知識人層として無視できない存在であったことを鑑みれば，近世までの医学史研究者だけでなく，幅広い日本の歴史研究者が手元に置いておくべき書ではあるが，非売品な点だけが非常に残念である．

（松村　紀明）

［日本内経医学会，2018年3月，B5判，654頁，非売品］

安田登・久保寺司・水谷惟紗久 著
『歯科医療のシステムと経済―― 18世紀から21世紀まで――』

これからの歯科医療のあり方を考えるために，公的保険制度，医療費，予防／治療，地域医療，高齢化社会，歯科医師・歯科技工士・歯科衛生士・歯科助手などのプロフェッション，診断・治療機器などの多様なトピックについて，経済的側面を中心に現状の問題点も含めて平易に解説した本である．そうした歯科医療の現状・未来を考えるにあたり，これまでの歴史的経緯を俯瞰するところから始まっているところに，本書の大きな特長がある．簡単に目次を紹介しておこう．

第1章　歯科医療システムの過去と未来（水谷惟紗久）
　講義1：公的医療システムの成立と展開
　講義2：日本の医療システムの特徴
　講義3：公的医療システムの疑問とこれから
第2章　21世紀の歯科が見える15のキーワード（安田登・水谷惟紗久）
第3章　国内外の展示会から見えたデンタル器械市場の動き（久保寺司）

このうち歴史にかんする解説が配置されているのは第1章（とくに講義1）であり，18世紀以来の医療需要拡大，専門職の資格制度，社会保障制度の整備などが，欧米（とくにイギリス）や日本でどのように展開してきたのか，そのアウトラインが掴めるようになっている．イラストも豊富で，読みやすくなるような工夫が全編にわたってほどこされている．また，参考になる数量データも随所に掲載されている．歯科関係者はもとよ